

資 料

富山市浜黒崎沿岸におけるホシフグの異常漂着

吉岡 翼

富山市科学博物館 939-8084 富山市西中野町一丁目8-31

Unusual Stranding of *Arothron firmamentum* on Hamakurosaki Beach, Toyama

Tasuku Yoshioka

Toyama Science Museum,

1-8-31 Nishinakano-machi, Toyama 939-8084, Japan

1. はじめに

温帯から亜熱帯の外洋深所に生息するホシフグ *Arothron firmamentum* は冬期の日本海沿岸でしばしば定置網への大量入網や海岸への大量漂着で話題となる。2023年1月中旬, 秋田県から福井県にかけてホシフグの大量入網・漂着が相次ぎ, 特に新潟県村上市では10万個体を超えるとされる大量漂着が, 新聞やテレビなどでも取り上げられ注目された。富山湾でもこれまでに定置網での記録はあるが(魚津水族博物館, 1997), まとまった漂着記録はなく, 新潟県を中心に大量漂着があった2013~2014年においても, 富山県内における漂着情報はないとされている(本間ほか, 2014)。

SNS の情報などによると, 2023年の大量漂着に先立ち, 2022年12月末頃から富山県沿岸においても大量入網があった。1月20日には高岡市でも30個体ほどの漂着があり, 地元テレビ局が報道した。

富山市浜黒崎海岸においても1月中旬に例年にない数の漂着があったため, 本稿において報告する。なお, 浜黒崎海岸に漂着した1個体を富山市科学博物館に保管した。

2. 漂着記録

2023年1月15日午後, 浜黒崎海岸(吉岡, 2020のM1~M3およびWm)の前浜上部の漂着帯にホシフグ86個体が漂着していた(図1)。このうち74個体が40 mほどの範囲に集中していた(吉岡, 2020のM1~M2)。また, クサフグ(吉岡, 2020のM3)とウミウ(吉岡, 2020のWm)も各1個体漂着していた。ホシフグは目や皮膚の一部, ひれの遠位部が傷ついた個体もあったが, 図1Bのよう

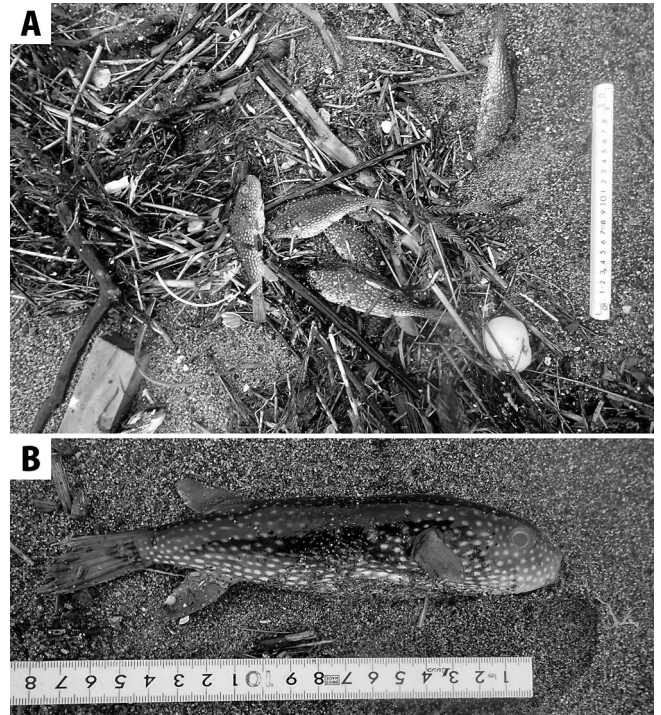


図1 浜黒崎海岸におけるホシフグの漂着状況。A 漂着帯の様子。B 漂着個体の拡大。右上のスケール(折尺)は縦23.5 cm。

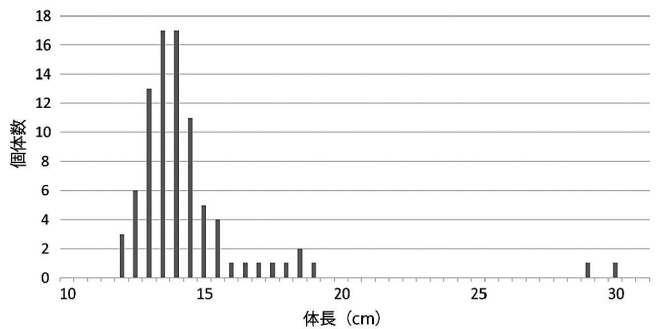


図2 浜黒崎海岸に漂着したホシフグの体長別頻度分布。

に腐敗や乾燥は進んでいない状態であった。離岸堤の陸側海面にはカモ類がいたが, 調査中に浜を利用している鳥類はハクセキレイのみで, ホシフグに鳥類がついばんだような形跡はなかった。

当日は雨ないし曇りで, 調査時にはやや強い北風が吹いていた。ナウファス(全国港湾海洋波浪情報網)および富山気象台の記録によると, 14日夕から波高が2 m弱とやや高く, 北寄りの風が卓越していた。

漂着個体の体長は14 cm程度のものが多く, 最大で30 cmであった(図2)。最大サイズの個体は尾びれの先端が欠損していたが, 全長は35 cmを超える。報道による村上市や高岡市の漂着個体も大半は15 cm程度のものとされ, 浜黒崎海岸の漂着例と似ている。ホシフグは小型個体が群れをつくるとされ(松浦, 2017; 福井・木村,

2017), 沿岸に近づいた群れごと打ち上がったか, 低温等による自然死ないし群れごと定置網に入ったものが放棄されるなどしてまとまって流れ着いた可能性もある. 一方, 新潟市での漂着例では大型の個体が目立ち(本間ほか, 2014; 安藤, 2023), 漂着個体のサイズに地域差が認められるようである.

浜黒崎海岸で漂着が確認された2日後の1月17日には, 八重津浜と岩瀬浜でも漂着個体の探索を行い, 八重津浜で2個体, 岩瀬浜で4個体の漂着を確認した. いずれも前浜上部から後浜にかけての漂着帯に腐敗・乾燥が進行した状態で見つかった. 17日まで波は落ちていたことから, 14日夕から15日に打ち上げられ, そのまま浜に残っていたものと思われる. 体長は25~32 cmで, 浜黒崎海岸のものより大型であった.

浜黒崎海岸へ21日に再訪したところ, 乾燥・腐敗が進んだ21個体(うち全身があるものは3個体)が残っており, 23日には乾燥してはいるが新たに漂着したと思われる2個体が見られた.

魚類の漂着は腐敗して悪臭を放つため沿岸住民や海岸利用者から嫌われるが, 沿岸を利用する生物の餌資源ともなる. しばしば発生する大量漂着が沿岸生態系に与える影響や, 魚類漂着遺骸の死後過程について理解されていることは少なく, ホシフグのような南方性あるいは深海性の珍希種に限らず, 漂着事例について情報の蓄積が望まれる.

3. 謝辞

富山市科学博物館の清水海渡氏には, 漂着したホシフグを標本化していただいた. 記して感謝申し上げる.

4. 引用文献

- 安藤悠太, 2023. ホシフグが大量漂着しました. 新潟県水産海洋研究所 水産・研究情報. <https://www.pref.niigata.lg.jp/site/suisan-kenkyu/230113hoshihugu.html> [2023年1月31日閲覧]
- 福井美乃・本村浩之, 2017. トカラ列島臥蛇島沖で観察されたホシフグの繁殖行動. カゴシマネイチャー, 43: 243-247.
- 本間義治・箕輪一博・中村幸弘・馬場正志・青柳 彰・田口水紀・小田美郷・野村卓之・佐藤 修, 2014. 2013~2014年に新潟県沿岸へ漂着もしくは捕獲された珍奇動物ーホシフグとダイオウイカを中心に. 柏崎市立博物館館報, (28): 66-69.
- 松浦啓一, 2017. 日本産フグ類図鑑. 127p. 東海大学出版部.
- 魚津水族博物館, 1997. 富山湾産魚類リストおよび富山

湾産希少魚類の採集記録. 79p.+8pl. 魚津水族博物館.

- 吉岡 翼, 2020. 生息環境の人為的な攪乱に関連したスズメガイダマシ類(腕足類)の大量漂着. 漂着物学会誌, 18: 13-18.